

## 第3章

# 「いじめ」の加害者について

「いじめ」問題への関心は、これまで多くが被害者に向けられてきており、加害者の心理や行動には、十分な接近がされてこなかった。しかし加害者がいて初めて「いじめ」が起こることを考えると、加害者の心理と行動に、われわれはもっと関心を払うべきではなからうか。

この章では、「いじめ」の加害者と傍観者の心理をみていくことにする。

### 1. 「いじめ」に加わった体験

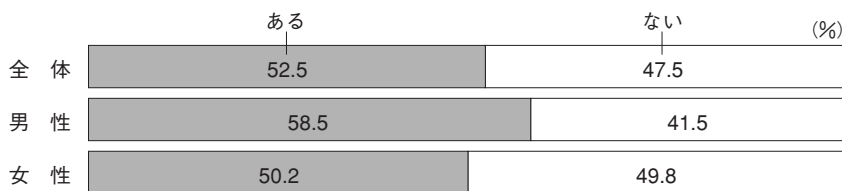
調査対象の大学生は、小中高時代、どの程度「いじめ」に加わったことがあるのだろうか。

図1-3-1によれば、サンプル全体の半数が、いじめに加わったことが「ある」と答えている。「いじめる」という加害行為が、ごく一部の子どもたちの間の出来事ではなく、多くの子どもたちが体験している行為であることに、改めて衝撃を

感じる。「いじめ」への参加度は男性58.5%、女性50.2%で、男性の参加度が高い。

また加害者の立場に身を置く際にも、中心人物（リーダー）として行為したか、または皆と一緒にになって、いわばリーダーに追従する形で（フォロワーとして）参加したか。表1-3-1によれば、リーダーとして友だちをいじめた体験は、小学校時代が最も多く、男性で16.3%、女性で7.9%であり、有意な性差がある。また学校段階でみると、中学校時代、高校時代では、同様に男性が多い。また「皆と一緒にになっていじめた経験」は、表1-3-2にあるように、小学校時代では8割強で性差はないが、この付和雷同型の「いじめ」は中学校時代では男性で59.2%、女性では49.3%で、小学校時代より減少するものの、男性の方に有意に多い。また高校時代になると、割合はさらに減少するが、男性17.3%、女性12.0%と、やはり男性の参加度が高くなっている。

■図1-3-1 「いじめ」に加わったことがあるか×性



■表1-3-1 「いじめ」の中心（リーダー）だったことがある×性

	(%)		
	全体	男性	女性
小学校時代	10.5	16.3	7.9 **
中学校時代	5.0	8.3	3.6 *
高校時代	1.3	2.1	0.9

「はい」の割合  
\*\* p<.01 \*p<.05

■表1-3-2 皆と一緒にになっていじめたことがある×性

	(%)		
	全体	男性	女性
小学校時代	85.1	84.5	85.3
中学校時代	52.3	59.2	49.3 *
高校時代	13.6	17.3	12.0

「はい」の割合  
\*p<.05

## 2. 「いじめ」の種類

では、どんな「いじめ」行為をしたか。表1-3-3は、小学校時代にした「いじめ」である。男性では「嫌がることをする」(71.5%)、次に「無視」(51.9%)、「暴力」(19.0%)で、女性では「無視」(79.1%)、次に「嫌がることをする」(33.7%)であり、性差が大きい。女性は「暴力」に訴えることは少ない(2.9%)が、「無視」が多く、男性に多くみられたのは「嫌がることをする」で、女性の2倍以上となっている。「暴力」を用いるのは全体では少数だが、男性が2割と女性より多い。

このような性差は、中学校時代、高校時代にもみられる。表1-3-4は中学校時代の「いじめ」

だが、小学校時代の「いじめ」と同様、女性は「無視」、男性は「嫌がることをする」が最も多い。また表は省略したが、高校時代になると「いじめ」の数は減少するが、女性では「無視」が多く、男性では「無視」と「嫌がることをする」が多くなっている。

小中高時代を通してみると、女性のいじめは「無視型」、男性のいじめは「嫌がらせ型」が多いことがわかる。

では一番印象に残っているのは、どの時代のものか。表1-3-5に示したように、小学校時代を挙げる者が男女とも多い。また、小学校時代の「いじめ」を一番印象に残っているとする者は女性がやや多く、中学校時代、高校時代は男性にやや多い。

■表1-3-3 どのような「いじめ」をしたか(小学校時代)×性

	(%)		
	全体	男性	女性
暴力	7.6	19.0	2.9 **
無視	71.2	51.9	79.1 **
嫌がることをする	44.7	71.5	33.7 **
その他	13.1	7.0	15.7 **

複数回答  
\*\* p<.01

■表1-3-4 どのような「いじめ」をしたか(中学校時代)×性

	(%)		
	全体	男性	女性
暴力	8.1	19.5	2.3 **
無視	73.2	52.2	84.0 **
嫌がることをする	38.0	63.7	24.7 **
その他	10.2	9.7	10.5

複数回答  
\*\* p<.01

■表1-3-5 「いじめ」に加わった体験の中で、一番印象に残っている時代×性\*

	(%)		
	全体	男性	女性
小学校時代	64.5	57.3	67.6
中学校時代	29.7	34.2	27.8
高校時代	5.8	8.5	4.6

\* p<.05

### 3. 「いじめ」加害の心理

大学生に、当時どんな気持ちで「いじめ」に加わっていたかを尋ねた。

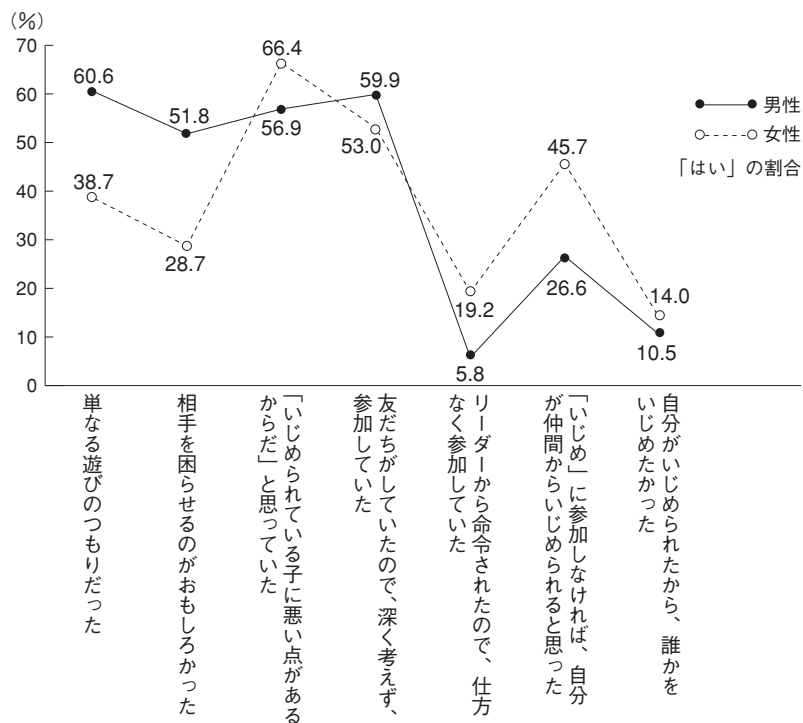
図1-3-2をみると、男性と女性では、「いじめ」に加わる心理が違うことがわかる。男性で多いのは「単なる遊びのつもりだった」(60.6%)であるが、女性は38.7%と低く、また男性に多い「相手を困らせるのがおもしろかった」(51.8%)は、女性では28.7%と低いことがわかる。

また女性で多いのは「『いじめられている子に悪い点があるからだ』と思っていた」(66.4%)で、次いで「友だちがしていたので、深く考えず、参加していた」(53.0%)、『いじめ』に参加しな

ければ、自分が仲間からいじめられると思った」(45.7%)となる。

気になるのは「『いじめられている子に悪い点があるからだ』と思っていた」が6割前後いることで、「いじめられている子にも悪い点がある」と、自分の立場を正当化しようとするのは、責任転嫁の論理である。ケンカには理由があるが、これに対して「いじめ」はターゲットを選んでゲーム的に行われる。にもかかわらず、「いじめ」を正当な行為だと思っている子どもたちには、人権についての教育が必要ではなからうか。なお、男性の「いじめ」は「遊び・嫌がらせ型」、女性の「いじめ」は「リーダー・追従型」の特徴を持っているとまとめられよう。

■図1-3-2 どんな気持ちで「いじめ」に加わったか×性



#### 4. 周囲の「いじめ」にどう介入したか

周囲で他の子がしていた「いじめ」に、彼らはどのようにふるまったか。自分が巻き込まれてしまった場合も含めて、介入の仕方を見た。

図1-3-3は「いじめられていた子」への介入の仕方だが、図の一番左側の項目「その子のことを、先生に相談した」から、「いじめられている子に手紙を出したり、電話をししたりした」までの6項目が積極的介入である。全体的に決して多いとはいえないが、女性の方が「自分の親に、その子のことを話した」(22.6%)や、「いじめられている子と(人の見ていないところで)話したり遊んだりした」(22.5%)が多い。

男性で多いのは「自分には関係ないと思っていた」(男性28.6%、女性16.2%)という無関心さと、「自分も『いじめ』に加わってしまった」(男性24.8%、女性15.7%)である。女性の方が、やや援助的なのかもしれない。

しかし、男女とも「自分は、ふつうに接していた」がそれぞれ半数を占めているのは、腑に落ちない。ふつうに接してくれる(ふつうに言葉を交

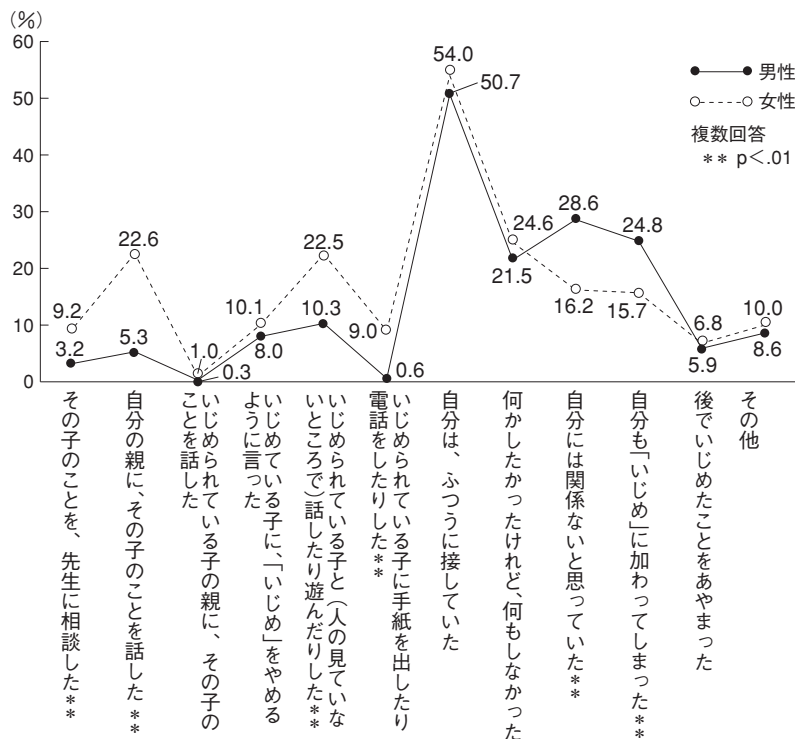
わし、ふつうに一緒に行動してくれる)友だちがいれば、被害者は決して孤独地獄の中には落ちないはずなのに。ふだんからお互いに「我関せず、無関心状態」が、「ふつう」なのだろうか。

しかし、「何かしたかったけれど、何もしなかった」者も、かなり高い割合(男性21.5%、女性24.6%)でおり、「気持ちはあっても勇気がなかった」といっている。気持ちはあっただけ救われる思いもあるが、その気持ちを行動に移させるのが、われわれに要請される「勇気の教育」なのではなかろうか。

介入の仕方を見ると、男性は攻撃的で、女性は共感的、援助的であるといえそうである。

なお「いじめられていた子」への介入の仕方は、学校段階別にみると、表は省略したが、高校時代は積極的介入も加害的な「自分も『いじめ』に加わってしまった」者もほとんどなく、介入しない者が多い。「自分も『いじめ』に加わってしまった」という、加害的介入に関しては、小学校時代が最も多く、次いで中学校時代である。発達段階が進むと共に、少しずつ主体性が増し、自分の考えで行動することができはじめる傾向もみられる。

■図1-3-3 「いじめられていた子」に対してどうしたか×性



## 5. 仲良しの友だちへの「いじめ」

### 1) 仲良しをいじめた体験

「いじめ」は往々にして、それまで仲のよかった友だちをある日突然ターゲットにして行われる。その心理は、おとなには不可解なもの1つである。親友が攻撃のターゲットになったら、身を挺して守ろうとする、いわば「志のある人間」、とりわけ純真な者たち（子ども）の行動の仕方はなからうか。

図1-3-4は「仲良しだった友だちを皆と一緒にいじめたことがある」者の割合である。女性39.4%、男性18.7%で、明らかな性差がみられる。女性は3人に1人が仲のよかった友だちをいじめた体験をもっているが、男性は6人に1人である。男性が友情に厚いのか、女性に付和雷同性が高いのか。

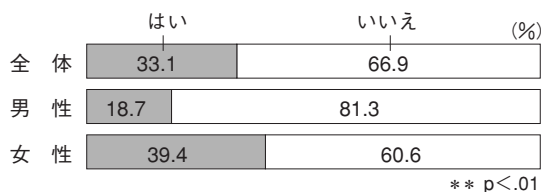
表1-3-6にみるように、仲良しだった友だちをいじめたのは、小学校時代が67.6%と最も多く、中学校時代38.3%、高校時代8.6%と、年齢が上がるにつれて、さすがに減少していく。

### 2) ターゲットにした理由

子どもたちは、なぜ仲良しの友だちまでをいじめめるのか。図1-3-5、図1-3-6は、小学校時代と中学校時代に仲良しの友だちをいじめた理由である。

小学校時代も中学校時代も、最も多いのは「ふだんからあった不満から」である。どんなに仲がよい友だちでも、誰でも日常的に少しの不満はある。おとななら、そうした不満も仲良しの友だち故に吞み込んでしまうが、子どもはそうはいかないのかもしれない。ふだんの鬱憤を晴らすために、ここぞとばかり攻撃に出るのであろう。小学校時代は性差はないが、中学生になると明らかな性差が出てきて、女性59.0%、男性42.9%となる。日々の小さな不満を超える友情は、子どもたちの間に、まだ形成されていないのだろうか。また、女性は中学校時代に「リーダーに命令されたから」が21.3%、男性はゼロである。女性の主体性のなさがかいま見えるのは、やりきれない。男性は（仲良しといっても）「その友だちにいじめられたことがあったから」が7.1%で、女性の3.3%より高い。男性の方が報復的なのであろうか。

■図1-3-4 仲良しだった友だちを、皆と一緒にいじめたことがあるか × 性\*\*

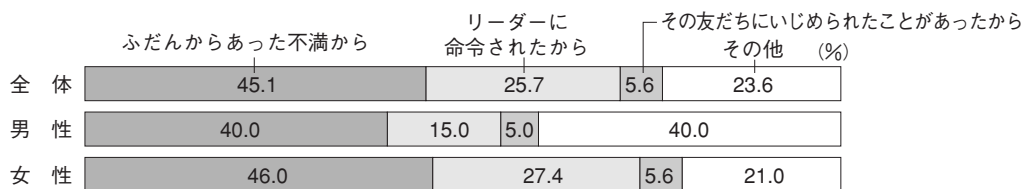


■表1-3-6 仲良しだった友だちをいじめたのはいつか × 性 (%)

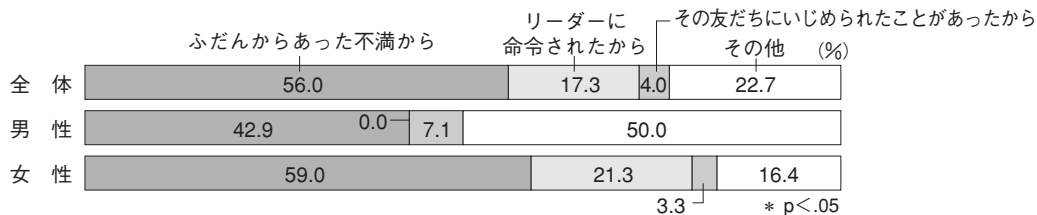
	全体	男性	女性
小学校時代	67.6	52.6	70.7 *
中学校時代	38.3	42.1	37.5
高校時代	8.6	13.2	7.6

複数回答  
\* p<.05

■図1-3-5 仲良しの友だちをいじめたのはなぜか（小学校時代） × 性



■図1-3-6 仲良しの友だちをいじめたのはなぜか（中学校時代） × 性 \*



### 3) 「いじめ」が終わった後の修復状態

仲良しの友だちへの「いじめ」は、その後どのような経過をたどるのか。「ほぼ、もと通りになった」か、それとも「ギクシャクしたままだった」か。

図1-3-7、図1-3-8によれば、小学校時代も中学校時代もおよそ65%が「ほぼ、もと通りになった」としている。しかし、「ギクシャクしたままだった」も小学校時代で22.4%、中学校時代で28.6%もあり、一度壊されてしまうと、仲良しの子との関係も、なかなか修復できないのであろう。

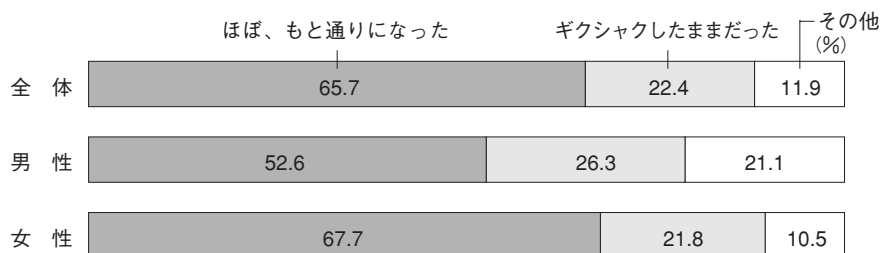
それでは、「いじめ」に直接参加しなくても、仲良しの友だちがいじめられていたとき、「傍観者」だったことはあるのだろうか。もしその体験

があるとしたら、いつの時代だったのか。

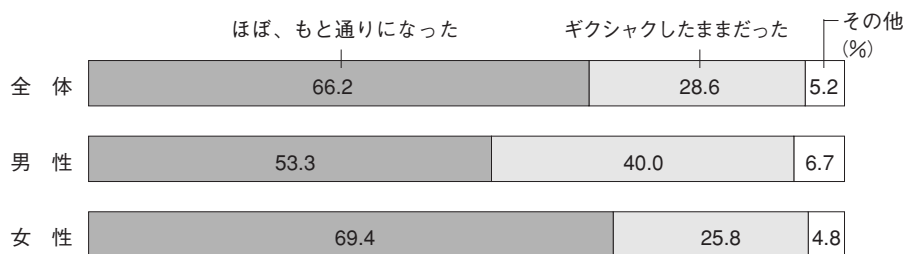
### 4) 傍観者だった体験

表1-3-7によれば、仲良しの友だちが「いじめ」にあっていたとき、傍観していた体験がある者は、全体で27.3%。また、男性より女性の方がそうした体験、いわば友情を発揮しなかった体験が多い傾向もみられる。また、表は省略したが、傍観していた体験は、全体で小学校時代が最も多く(63.7%)、中学校時代(49.2%)、高校時代(8.4%)と次第に減少する。小学校時代に多い理由は、いじめの件数が多いことにもよるのであろうが、仲間の圧力に抗して仲良しの友だちへの「いじめ」をやめさせようとする強さが、まだ育っていないのであろう。

■図1-3-7 「いじめ」が解消してから、その子との関係を修復できたか(小学校時代) × 性



■図1-3-8 「いじめ」が解消してから、その子との関係を修復できたか(中学校時代) × 性



■表1-3-7 仲良しの友だちがいじめられていたとき、傍観者だったことがあるか × 性

	(%)		
	全体	男性	女性
はい	27.3	22.4	29.3
いいえ	72.7	77.6	70.7